

追悼の辞

大千軒の連峰から津軽の山々へ続く海峡の風景は少しずつ夏の青さを増し、今年もまた変わりなく皆様の記憶に残るふるさと福島を映し出しております。

浜は、真昆布の収穫、ウニ漁でにぎわい。

乳白色の栗の花が咲き、田んぼの苗も、日に日にその緑を増してきました。

熊出没の恐怖が続き、犠牲の連鎖をとどめる電気柵等の対策も続いておりますが、山鳥の鳴き声が響き、ツバメが飛び交い、カエルも賑やかに鳴きだし、故郷・福島も暑い夏がはじまりました。

戦後八十年を越え、今なお、遺骨を収集し、遺族を捜す努力が続けられております。海外戦没者二百四十万人、約百十二万柱の遺骨は、未だに家族の元へ帰ることなく不明であり、無念の思いを抱いて亡くなられた方々への遺族の心の痛みを消し去る事は出来ません。

六月二十三日、今年もまた、沖縄戦最後の激戦地とな

った糸満市摩文仁の丘で沖縄全戦没者追悼式が行われ、
沖縄豊見城市立豊崎中学校二年生亀谷琉奈さんの「生
きたいと願った証」と題する「平和の詩」が朗読され
ました。「あの日沖縄には、青い海もやさしい風もなか
った、空は黒く、地面は揺れ、人々の叫び声が絶えな
かった」と始まり「血と涙の中を生き抜いた人たちが、
命を繋いでくれたから、今の私たちがいる」と続き、「平
和は当たり前じゃない、沢山の人の涙と苦しみと、『生
きたい』という願いの上にある、だから私は忘れない、
愛する人を守ろうとした想いを、泣きながら生き抜い
た人たちを、『生きたい』と願った証の傷を、平和な未
来へと繋いでいくために」と綴られておりました。

戦争に直接参戦した兵士のみならず、戦禍を避けるす
べもなかった市井の人々の尊い生命を奪い、残された
多くの人の心をも深く傷つけた戦争の悲惨な事実、
忘れてはならず、けっして繰り返してはならず、脳裏
に強く記憶し、後世に伝え続けなければなりません、
悲惨・冷酷な事実を忘却し、専守防衛を踏み越え、軍

備拡大を推し進めようとする動向も懸念されます。

「核なき世界」の実現を改めて呼びかけ、核廃絶に向けた具体的な「行動計画」を採択した核兵器禁止条約批准国も七十五ヶ国となりましたが、残念ながら、日本は、依然として条約批准を拒絶し続けております。

大戦の苦い経験を経て、唯一の原爆被爆国である事を意識し、平和を希求する日本国民の固い決意を込め、憲法の基本姿勢として、『戦争の放棄』を規定した日本の言動が、重要な意味を持つ状況は続きます。

私どもは、ここに、平和を願い、ひたすら家族の幸せを願いつつ散華され、故郷福島を見守る皆様にあらためて思いを馳せ、恒久平和の実現に努力を傾ける事をお誓いし、御霊の平安をお祈りし、哀悼の真を捧げ、追悼の辞といたします。

令和八年七月十六日

福島町議会

議長 溝部 幸基